

バッハの曲をピアノで弾くことの至上の幸福感をうたった今月の六首。一七二二年の日付けの曲を作者に直接聞いたところ、バッハの「平均律クラヴィーア曲集」第一巻の一曲目の前奏曲とのこと。三百年の時間を越えてわかり合う不思議。音だけではなくピアノを弾く指も、幸福感を味わっているにちがいない。一連中には、「ピアノから流れだす調べそれはもう神の言葉と言うほかはない」ともあった。

五十年ぶり大雪ふればマドリッド王宮前にスキーする人
北澤道子

かつて滞在したことのあるスペイン・マドリッドの近況を、友人からのメールで知った一連。五十年ぶりの大雪、という意想外の映像に興奮している感じがストリートに伝わってくる。

野球部にありしやくせ毛の少年の受験票には坊主の写真
小林賢太

入学試験の監督として教室を見回っている場面に取材した作。机の上に本人確認のための写真入りの受験票が置かれているのだ。私も何度か経験したが、入試の試験監督は退屈で時間をもてあましたりする。一連に「メガネの子が何人あるか数へたり八十分の試験監督」という歌もあった。「わかる、わかる」と思わずうなずいたりした。

独りとはこんなに寂しきものなのか一月一日一人の雑煮
松田英美

下旬、「一」を三つ重ねてリズムをとりつつ、視覚的

にも一人を強調する効果をあげている。かつては何人もいた家族が、だんだん少なくなつて、今は一人。正月はとくにそのことが実感されるのである。余談だが、「朝日歌壇」の投稿歌に、特に今年の正月の投稿歌に、一人住まいを題材にした歌がきわめて多かつた。自粛要請で外出する機会が減つたせいもあるかも知れないが、正月の「一人の雑煮」は心にしみる味がするのだ。

隻眼のフェルマータに見つめらる「菫」を歌ふ真冬の昼
松元雅子

楽譜を見ながら古いイタリア歌曲をうたっている場面。「フェルマータ」は延長記号と訳される楽譜中の記号で、人間の目のような形をしている。「菫」はイタリア歌曲の曲名。用語もイメージも、きわめて具体的なのが特色で、インパクトの強い作に仕上がっている。

「緊急引渡し訓練」無事終はり霜月のみち動悸がすこし
菊本鏡子

宮城県の小学校（だろう）では、東日本大震災の教訓を活かして、「緊急引渡し訓練」を定期的に行っているのだろう。場面の取り方が、うまい。「……霜月のみち動悸がすこし」。訓練の最中ではなく、訓練が終わつてやや後にピントを合わせている。

水の色深くしづめて滔々と川は流れる雪の盆地を
松本秀一

雪の盆地を流れる川の色が通常とはちがう、という。「水の色深くしづめて」で、そのデリケートな差異を暗示しているところがポイント。